石高の事

赤松則良談

幕府時代の諸大名の実力は其石高に依つて大体を推測することが出来る。封建時代には土地人民を分割して諸侯に与へ此領主は其土地から生ずる収獲（米穀）の一部を徴して領内の人民を統治し併せて国家に対し負担する軍役の政費に充てたのである。この収獲の見積を石高といつた。此見積法を地方法（チカレハウ）といつて庄屋や名主其他代官の下役など卑しい文官が心得て処理して居り身分の高い武士はこの柄な地方のことなど知らぬのを誇りとして居た。其大要を説明すると例へば一萬石の高といへば一萬石の米穀の収獲がある土地を指していふのである。これを分配する（農民が力作の一部を貢租として領主へ納付するのである）この領主への納入を一口に萬石萬俵の法蔵入りといつたが其の配分の割合は一俵三斗五升入として一萬石の大名は三千五百石の収納となる。此を三つ半取といふこの比例が普通であつた。農民がいへば一石の米の三斗五升は領主へ

国立国会図書館　赤松則良関係文書 48

六斗五升が自分の取前といふので平均した一般的な所であるが、時には五公五民とか七公三民といふやうな重い貢祖を負担していた或村とか或田とかいふ特例もあった、武鑑に現れている諸大名の石高は公称で表高といったが、これを軍役高ともいっていたのは百石に就て三人の兵とそれに伴ふ兵器を平素準備して置くべき責任があったので、旗本でも家中の武士でも石取は皆百石三人の割合で軍役の負担があるのである。

表高は十萬石でも実際は二十萬石も三十萬石もの収獲があた場合もあるこれを表高に対して内高といったこの称なのは内福大名と呼ばれ敗政が裕かであった。

津軽藩の如きは慶長以来表高四萬石と称されたが後には二三十萬石の実収があるやうになつた是れは当初偏土であつて人口稀薄未開墾地が多かったのが漸次開拓が行はれた爲めに此の如く多大の差が生じたので著しい例である、これとは反対の例に所替といふことがあ

国立国会図書館　赤松則良関係文書 48

る、先づ大部分は讃責の意味があるので領分
替の大名には皆表高一杯の収獲に余裕の無い
土地が与へられるこれは其命を受けた者には
頗る苦痛であつた。

コクヨ　B4　20×20

国立国会図書館　赤松則良関係文書 48